# 「十三世紀ペルシア神秘主義詩人ルーミーの『精神的マスナヴィー』より〜「葦の嘆き」を読み解く〜」及び「ペルシア文学を読み解く：ルーミーの説話の世界」

報告　佐々木あや乃

二〇一八年度、報告者は春・夏学期に特別研修の機会と同時に、ＪＳＰＳの外国人研究者招へいプログラムによるイラン人研究者招へいの機会にも恵まれた。さらに新たな科学研究費（基盤研究（Ｃ）「ペルシア語神秘主義詩人ルーミーのマスナヴィー（叙事詩）に関する基礎的研究」）によるプロジェクトの始動も相俟って、総合文化研究所の協力のもと、標記の二つのペルシア文学講演会が実現する運びとなった。

まず、「十三世紀ペルシア神秘主義詩人ルーミーの『精神的マスナヴィー』より〜「葦の嘆き」を読み解く〜」は、二〇〇九年春にもＪＳＰＳの同プログラムで本学に約二ヶ月滞在していただいた、在テヘラン人文学・文化学研究所文学部門教授のタギー・プールナームダーリヤーン氏のペルシア語による公開授業である。氏はイラン国内でペルシア文学研究の第一人者であり、そのペルシア語神秘主義文学作品の校訂と新解釈で世界中の研究者の耳目を集めている。絶えず講演、授業、博士論文指導の依頼が舞い込むものの、国内での講演や論文指導に応じることはほぼ皆無である。しかし、それでも報告者がテヘラン大学留学時、氏に博士論文指導を仰いだのは、その豊富な知識と指導力のみならず、氏の穏やかで温厚な人柄も大きな決め手だったのであり、今回も日本でならばと氏が講演を引き受けてくれることを見越して、報告者は再びの招へいを試みた。それが実現して報告者は勿論、日本のペルシア文学研究者たちの喜びも一入だったはずである。

氏の講演内容に先立ち、ペルシア神秘主義詩人ルーミーの『精神的マスナヴィー』について簡単に紹介しておこう。『精神的マスナヴィー』は、ルーミーの約二世紀後の詩人、十五世紀のジャーミーに「ペルシア語のクルアーン」と言わせしめた、ペルシア神秘主義文学の大著である。原語では、mathnavī-ye maʿnavī と称され、かの井筒俊彦氏も指摘する通り、maʿnavī という語に「神秘主義的直観に基づく」、「神秘主義的体験において開示される実在の真相に淵源する」といった意味があることからわかるように、この作品には神秘家としてのルーミーの実在体験が反映されている。作品全体はマスナヴィー詩形からなる、全篇約二万六千行に及ぶ叙事詩であり、作品の冒頭十八詩行「葦の嘆き」と題される部分に、ルーミーの神秘主義思想が凝縮されているといっても過言ではない。それがヴァリエーション豊かな変奏曲たる数多の逸話となって全篇へと展開し、受け継がれていくのである。

プールナームダーリヤーン氏が、最初は控えめなトーンで、日本人ペルシア語既修者のために配慮しつつ講義を始めると、

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。
https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

会議室には心地よい緊張感が漲り、学部生を含む聴衆の集中度合いも一気に高まっていく。氏は、時に修辞技法や文法的な説明も織り交ぜながら、「葦の嘆き」を丁寧に読み進めていく。心地よいリズムを持つペルシア古典詩の音が生み出す魔法にかかったかのような、イラン人研究者の徐々に熱を帯びていく声の調子や声量の変化、詩人本人がのり移ったかのようなエネルギッシュな様態には慣れているはずなのだが、プールナームダーリヤーン氏の、時間とともに高揚していく、しかも明るく楽しげな表情には、目の前の曇りを一気に晴れ渡らせるような、えもいわれぬ不思議な力がある、と報告者はいつも思う。

ここで、「葦の嘆き」の冒頭の四行を拙訳にて紹介しておこう。

この嫋々たる葦笛の音色をお聞きなさい
　別れの愁いを語っているのです
慣れ親しんだ葦の茂みから刈り取られて以来
　啜り泣く私の調べに　男も女も涙に咽ぶのです
別離の悲しみに私の胸は引き裂かれ
　逢いたくてたまらず苦痛を語るのです
誰であれ、太源から遠く引き離された者は切実に願うのです
　かつて結ばれていた頃に戻りたいと・・・

葦は、神が土を捏ね、形骸たる身体を創り、そこに息を吹き込んで魂を込め、この世に送り出した人間の喩えである。葦原は、万有の太源、実存の源たる神の御前である。神秘主義は宇宙の現象の奥深くで常に働きかける何かを感じ取る、いわば「自覚した」者の世界である。目覚めた者は実存の源を痛いほど意識し、それを意識すればするほど別離に苛まれ、自らを葦のように儚く頼りない存在と自覚し、己の源に還りたいと願う。そしてそれは自覚者の魂の、神に対する恋慕の情となり、熱く激しく燃え上がるのである。

この「葦の嘆き」のコンセプトを踏まえたうえで、『精神的マスナヴィー』の逸話に焦点を当てたのが、秋の講演会「ペルシア文学を読み解く：ルーミーの説話の世界」である。二〇一八年九月末日まで本学のペルシア語特定外国語主任教員で、報告者の上述の科研の連携研究者でもあるナスリーン・シャキービー氏が、ユング心理学的分析に基づいた、独自のマスナヴィー研究成果を披露することを快諾してくれた。

初回の講演では、「葦の嘆き」に続く第一話「王と美しい侍女」が題材として取り上げられた。ある王と王が見初めた乙女、彼女が恋い焦がれる金細工師、乙女の病を恋煩いと見抜き、王に治療方法を教える、天から遣わされた医師、といった面々が登場する、非常に有名な逸話である。単なる物語として楽しめるだけでなく、誰もが読後に深く考えさせられ、自分の内奥と向き合わざるを得ない、神秘主義的メッセージ性の高い逸話といえる。

続く翌週の講演は、預言者ムーサー（モーセ）にまつわる逸話二話の紹介から始まった。「モーセと羊飼い」と「モーセと逃げた羊」を通して、ルーミーの描いた己の存在の源に対する純粋な思慕と宗教的多元性に着目した講演となった。学部生・大学院生も多く参加していたため、授業形式で講演会は進行したが、通訳なしのペルシア語による講演であることを明示し忘れたため、ルーミーに関心を抱くもののペルシア語は解さな

い聴講者向けに、報告者が質疑応答を通訳せざるをえない状況に陥ったのは反省すべき点であった。しかし、奇しくも日本でのルーミー人気を推し量る好機となったともいえよう。なお、シャキービー氏には本年三月、別の逸話を取り上げた講演のため、再来日していただく予定である。

紙幅の関係上、三つの逸話の内容をここで各々詳細に紹介できないのが残念ではあるが、『精神的マスナヴィー』の逸話部分の下訳を終えたばかりの報告者は、そう遠くない将来、日本のルーミー愛好者に、『精神的マスナヴィー』の全ての逸話に触れることのできる機会を提供できればと目下画策中である。

「十三世紀ペルシア神秘主義詩人ルーミーの
『精神的マスナヴィー』より〜「葦の嘆き」を読み解く〜」
二〇一八年四月七日（土）・十四日（土）
講師：タギー・プールナームダーリヤーン

「ペルシア文学を読み解く：ルーミーの説話の世界」
二〇一八年十一月十九日（月）・二十六日（月）
講師：シャキービー・モムターズ・ナスリーン